

宝の海から

白浜で出会った生きものたち

63

京都大学助教授 久保田 信(京都大学 瀬戸臨海実験所)

北浜で初めての打ち上げ

クラゲの中にはクラゲ 封入標本づくり教室」で食を食するとうとう猛なウリクラゲも使った。この種類がある。それは8列の時期に須磨でよく採集の櫛(くし) 板を波のよされるからだ。

うに打たせ、光を浴びて虹色に輝きながら泳ぐウリクラゲだ。

櫛板は羊毛の束なのでこんな運動器官では強い遊泳力も出ないのだが、他のクラゲよりは機械に動く。1度接触したら絶対に逃さないどう猛さを持っており、がま口のよう口を開く口で一気に食べてしまう。獲物を求め、口の反対側にあるたった1個の感覚器で櫛板の運動を制御しながら海を漂う「プレテタ(捕食動物)」なのだ。

◇ 2月5日、前回紹介の「すま水ポランティアフエスタ」のワークショップの一つである「ゼリー」

2月5日、前回紹介の「すま水ポランティアフエスタ」のワークショップの一つである「ゼリー」



櫛板が虹色に輝くウリクラゲの生体(河村真理子院生撮影)

クラゲを食べるウリクラゲ

号)に紹介しているのだから。参考にしていただいた。

ウリクラゲは、体中を巡る管がメロンのネットのように複雑に分岐している。大きな体にはなら

だ。複雑な体だが、ウリクラゲの再生力は強く、体が少々傷んでも元の体

ウリクラゲもクシクラゲ類共通の性質である雌雄同体である。ただし、自家受精といって、自分自身の卵と精子を結合させるのは、遺伝学的によくないため、あまりやらない。

たウリクラゲが13番目になった。体長8センチほどのやや大きめの1個体と数センチほどのまだ小さな1個体が砂まみれで転がっていた。この日は、瀬戸漁港でも体長10センチほどの大きな1個体のウリクラゲが見られた。翌日も北浜に1個体が打ち上がった。

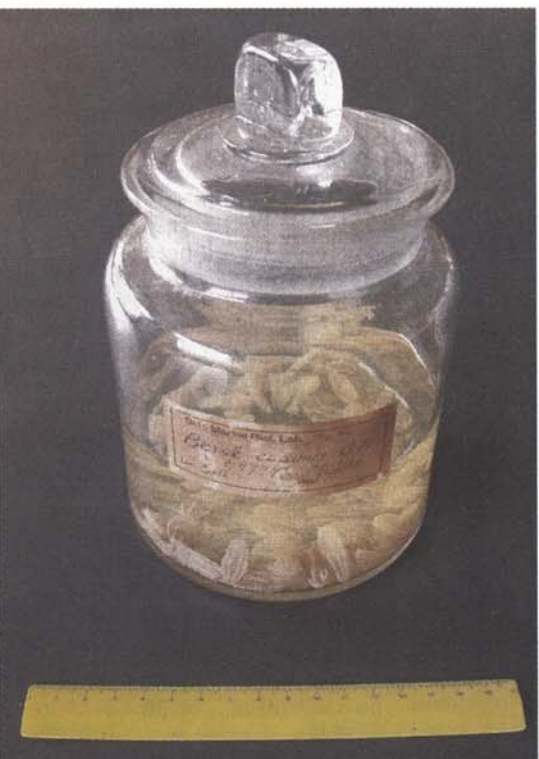
その後、北浜ではウリクラゲの打ち上げはなくなったが、瀬戸漁港では2月に入って3日間連続して出現したのを目撃した。

その後、北浜ではウリクラゲの打ち上げはなくなったが、瀬戸漁港では2月に入って3日間連続して出現したのを目撃した。



「クラゲのゼリー封入標本の作製とセッション」で指導する山田豊隆さん(渡辺淳一さん撮影)

以上も前に田辺湾から採集した標本は、いまでも学生たちに見られる状態だ。長円体のウリクラゲは、クシクラゲ類の2大グループの一つである無触手綱(むしくしゅこ)の代表種で日本中どこでも見られる。この綱(こう)の特徴は、生まれてから死ぬまでの発育段階にも触手がいないことである。そのため、この門に特徴的な膠胞(こうほう)を持っている。話はそのが、膠胞に幼生がうまれるのと大きな違いがある。



数十年以上も前に田辺湾から採集したウリクラゲの標本

胞は細胞1個が変形してできたもので、先端に多数ある粘着質の粒で引つけた獲物が、逃れようとしてもばね仕掛けになった螺旋(らせん)糸でひきもどすのだ。膠胞の不思議な造られ方を解明したのは、瀬戸臨海実験所初代所長の駒井卓先生だ。この論文は、今でもあちらこちらの教科書などに引用され続けている。優れた業績である。